



## 〈#MeToo以前のパイオニア〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

第二次世界大戦で負けたとき子どもだった私は、アメリカはとにかく仰ぎみる存在だった。文句なく、民主主義の国「レディーファーストの国」で、日本も早くそうならねばならないと学校の先生も言っていた。

政治、経済、軍事、カルチャーなど圧倒的なアメリカンパワーの傘の下にいて、何となくアメリカの女性は強くて自由だと思い込んでいた。だが、この映画を見れば、当時も今も、アメリカの男女差別は日本と変わらない部分が多いことがわかる。これは、現在八五歳の米国最高裁最高齢判事（終身）ルース・ギンズバーグの、平等社会への不屈の闘いと彼女を支えた強い家族愛の物語。

映画の冒頭はある方向に一斉に急ぐ男性たちの足の波。その中に一人だけハイヒールが。人の群れは大きな大学の建物に流れ込んでゆく。エレベーターに乗っても、教室に入っても、男性

ばかり。あ、一人だけ、さっきの女性か……。一九五六年、ハーバード大学法科大学院に入学したルース（ジョーンズ）の平等への闘いの人生を象徴するような場面だ。五〇〇人の新入生のうち、女性は九人（一・八％）。入学の歓迎会で「男子の席を奪ってまで入学した理由は？」と女子学生に問う学部長。「法科二年の夫マーティン（ハマー）を理解できる良き妻になるため」と皮肉たっぷりルース。実際、当時の名門大学の女子学生の多くは、卒業までにエリート学生との婚約指輪をゲットすることが目的だった、と同時期の名門女子大生活を描いた映画『モナリザ・スマイル』は描いている。だが、卒業後に郊外の大きな家で主婦として豊かな生活を送っても、自分の名前でもクレジットカードも作れない。働こうにも、女性には仕事を選べなかった。主婦は社会的には一人前とは扱われていなかった。

ルースは、マーティンと完全に平等に勉強も、家事も、出産後は子育ても協力し合い、夫ががんで入院すると、夫の授業にも出て完璧なノートを取って回復後に備えた。夫が無事に退院、卒業後はニューヨーク（NY）の法律事務所就職すると、自分もNYのコロンビア大学に移籍、首席で卒業する。だが、就活では「女性」を理由に十三社受けた会社すべてに落ち、女性差別を身をもって体験する。

落ち込む妻に、マーティンはある訴訟の記録を見せる。母親の介護をする男性に介護費用の控除が認められない、いわば男性差別への訴えで、ルースはこの裁判が「男女平等」の闘いの出発点になるかも、と自ら弁護を買って出る。だが、育児も介護も女性の仕事という決まりがあり、専門家らは「一〇〇％勝ち目はない裁判だ」と誰も力になつてくれない。権力側は、ルースをつぶすために最強のチームを組んで待ち構える。そして、ついに世紀の男女平等裁判の幕は切って落とされた…。

「#MeToo」と一緒に闘う仲間はなく、ルースは愛する夫と娘の応援を背に、世紀の逆転劇を勝ち取った。現在、全米で最も尊敬する女性四位という。

## 『ビリーブ 未来への大逆転』

アメリカ映画 (120分)

監督：ミミ・レダー

出演：フェリシティ・ジョーンズ、アーミー・ハマー、ジャスティン・セローほか

3月22日(金) TOHOシネマズ日比谷ほか  
全国順次ロードショー

©2018 STORYTELLER DISTRIBUTION CO., LLC.

